2026 年 11 月 22 日（日）第 580 回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

湧水がつなぐ農・森・人：三島モデルの地域循環再生



NPO 法人グラウンドワーク三島による活動報告として、独自開発のブランド米「ゆめみしま」の収穫成果・特徴・栽培環境と、松毛川流域における民有林の買収保全・植樹整備や子ども向け体験教育を通じた地域環境再生の取り組みを共有する。

三島ブランド米「ゆめみしま」の収穫成果と品種特性

三島市内の平田・梅名・長伏にある約 6,000 平米の耕作放棄地を復田化して 5〜6 年が経過、三島ブランド米「ゆめみしま」の今年の収穫量は昨年の 1.2 トンを大きく上回る約 2.1 トンに達した。

栽培には自然発生由来の肥料を使用し、化学肥料に依存しない自然志向の有機米として育てられている。

本品種は JT たばこ産業研究所（当時磐田市に所在）と連携し、5 年の歳月をかけて開発された。

ベースに地元・中郷地域の主要米である「愛知の誉」を採用し、腹持ちを良くするための「もち米」、米のテカリや見栄えを良くする「コシヒカリ」の要素を配合している。

さらに、台風による倒伏を防ぐために背丈を愛知の誉の 7 割程度に抑え、近年の猛暑にも耐えうる耐暑性を兼ね備えている。

開発初年度に試作した 5 種類から毎年 1 種類ずつ選別を重ねて完成に至り、農林水産省の新銘柄審査では 20 項目以上の基準をクリアして総合点 80%以上の最高ランク（最高級米）の評価を獲得した。

食味の最大の特徴は冷めても美味しい点にあり、お弁当やおにぎりにしても甘みが保たれ、口の中で解けるような食感と芳醇な香りを楽しめる。

現在、2 キロ 1,500 円、5 キロ 3,500 円で販売されており、得られた利益を通じて被災地へ 500 キロのお米を寄付する計画が進められている。

源兵衛川の水系構造と水温・水位管理による土壌再生

三島の中郷地域では、源兵衛川の豊富な湧水が毛細血管のように田畑へ供給されており、中央を流れる大溝川のほか、長伏方面へ流れる長伏堀、梅名方面へ流れる梅名堀などの水利体系が整備されている。

これらは奈良時代の条里制や江戸時代からの歴史を持ち、500 年以上もの間、収量を減らすことなく米作りを支え続けている。

この持続的な土壌の再現力を支えているのが源兵衛川の水である。

水流には空気（酸素）や栄養分、有用な微生物（バクテリア）が豊富に含まれており、人工的に滝のような落差を設けることでさらに多くの空気が取り込まれている。

春の代掻き作業によって泥と水がかき回され、水が地下へ一気に抜け落ちない「土床（つちどこ）」と呼ばれる畳のようなスポンジ状の層が形成される。

また、夏の酷暑に対しては「深水（ふかみず）」管理が徹底されている。源兵衛川の湧水は 17〜18 度（高くても 20 度程度）と冷たいため、田んぼに水を多く引き入れることで水温上昇を防ぐ温度調節が可能である。

排水溝脇に設置された高さの異なる「堰板（せきいた）」をこまめに差し替えることで水位を厳格にコントロールしており、こうした手間を惜しまない水管理が猛暑下での豊かな実りを実現している。

松毛川流域における緑地保全と環境再生アクション

約 23 年前から始まった松毛川（沼津川・灰塚川）の再生プロジェクトでは、当初のゴミや外来水生植物（ホテイアオイ）の撤去から始まり、繁茂した竹林の伐採へと活動を広げてきた。

竹林整備では、単に地上部を伐採するだけでなく、重機を入れて深さ 1 メートルを超える地下茎を根こそぎ掘り起こすことで竹の再繁茂を防止し、約 200 本の苗木を植樹して 4 年ほどで森へと再生させる実績を上げている。

流域の三島側には約 1,300 本の樹木があり、そのうち 130 本は樹齢 100 年以上の巨木である。

これらは 1 本ずつ測量・図面化されて管理されていますが、かつては 23 人の地権者に分筆されていた。

所有者の世代交代に伴い遠方に住む相続人が増え、管理が行き届かない中で、台風でわずかに傾いた樹齢約 180 年のケヤキの巨木が倒木リスクを懸念した所有者によって伐採されてしまう事件が発生した。

こうした貴重な自然の私的破壊を防ぎ、将来的に「サンクチュアリ（ジュラシックパークのような豊かな森）」を創出するため、グラウンドワーク三島は約 3,500 平米（約 1,200 坪）の民有林用地を地権者と個別に交渉し、助成金を活用して総額 600 万〜700 万円で一括買収した。

自らが地主となり保全責任を果たすこの「議論よりアクション」の姿勢が高く評価され、国・静岡県・沼津市・三島市から総額 6 億円の公的予算が投入されるに至り、直近 2 年間でも約 3 億円を投じた河川改修や散策路の整備、森林再生が実現した。

自然環境保全の継続的維持管理と地域体験教育

自然環境の保全には継続的な現場管理が不可欠であり、過酷な条件下でも着実に作業が継続されている。

先般の植樹活動では、予定の遅延を防ぐとともに植樹後の水まき作業を省略できるという利点を活かし、激しい雨の中で 200 本の植樹を完遂した。

また、水田では緑肥として活用するため、非常に微細なレンゲの種を均一に散布する作業も進められている。

耕作放棄地から再生させた水田では、手刈りした稲を天日干しにする伝統的な「はざ掛け」を行い、地域の原風景を再現している。

さらに、中郷西中学校・三島北中学校の生徒を受け入れ、職場体験として昔ながらの手刈りや脱穀作業を体験してもらう取り組みも予定されている。

グラウンドワーク三島の根底には「地域教育」の理念があり、普段口にしているお米の生産背景や身近な自然環境に直接触れる体験を通じて、子どもたちや市民が三島の歴史と自然を深く知り、地域への誇りと愛着（シビックプライド）を育む循環が生み出されている。